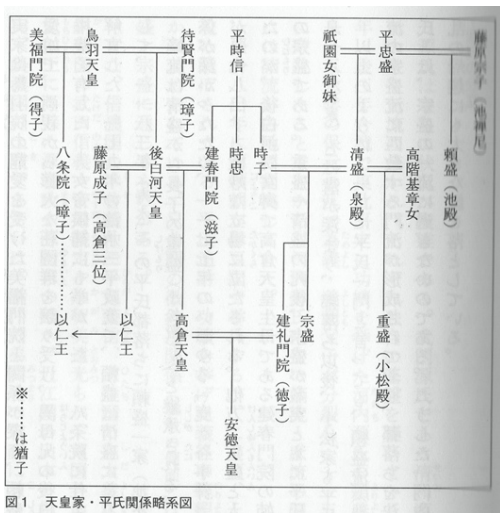


源頼朝の挙兵

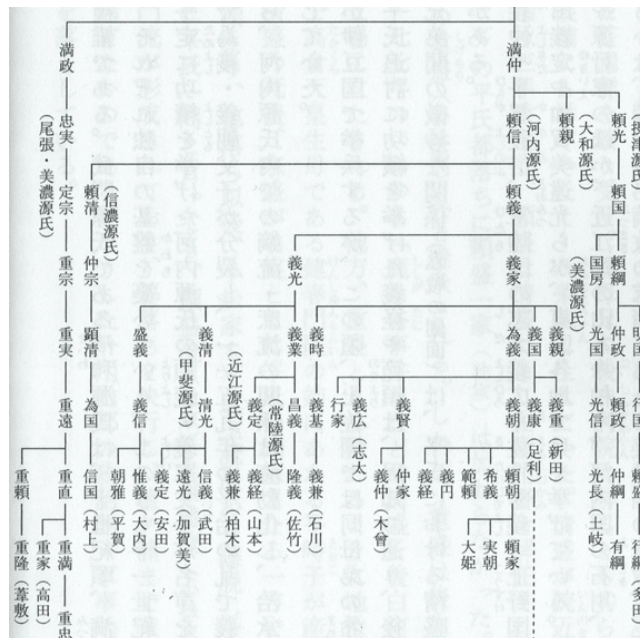
1 時代の状況

- ・清盛の権力掌握・平治元年（1159）の平治の乱でライバルの源義朝を破り、朝廷における軍事・警察の権限を一手に握る。仁安二年（1167）清盛太政大臣就任。
- ・治承三年政変・平氏の力が強大になるにつれて、後白河上皇と上皇の側近たちが平氏に反発し、両者が対立。ついに治承三年（1179）、清盛は武力によって後白河上皇を軟禁して院政を停止し、反平氏側の公卿を多数解任。治承四年（1180）には、安徳天皇即位。
- ・以仁王の挙兵・治承四年（1180）、以仁王が、源頼政と結んで反平氏の兵を挙げた。



- ・源頼政が協力した理由・以仁王をバックアップしていたこともあるが、源氏のなかでの主導権をとりたかったから。反乱はすぐに鎮圧されたが、内乱は収まらず。これから、平氏が滅亡する文治元年(1185)までを、「治承・寿永の乱」と呼ぶ。

1177. 5	鹿ヶ谷の陰謀
1179. 11	平清盛、後白河法皇を幽閉
1180. 2	安徳天皇即位
5	以仁王・源頼政ら挙兵、敗死
6	福原京遷都(11月には京都に戻す)
8	源頼朝挙兵、石橋山で敗れる
9	源義仲挙兵
10	・頼朝鎌倉入り。富士川の戦い
11	・頼朝、侍所を設置
12	平重衡、南都を焼打ち
1181. 閏2	清盛の死(64歳)
4~	養和の飢饉
1183. 5	俱利伽羅峰(砺波山)の戦い
7	平氏の都落ち、義仲入京
10	・後白河法皇、頼朝の東国支配権を認める
1184. 1	源範頼・義経、義仲を討つ
2	摂津一の谷の合戦
10	・頼朝、公文所・問注所を設置
1185. 2	讃岐屋島の合戦
3	壇の浦の戦い、平氏滅亡
11	・頼朝、守護・地頭を設置
1189. 9	頼朝、奥州平定
1192. 7	・頼朝、征夷大將軍となる



- ・各地の源氏・・頼政、行家、木曾義仲などをはじめ、頼朝のライバルがたくさんいた。
- ・伊豆の頼朝・・平治の乱後、頼朝は伊豆国の葦山に流されていた。20年後の治承四年(1180)、以仁王の令旨を受け、北条時政らの兵力に支えられて挙兵。
- ・葦山の位置・・狩野川や街道を介して、東海道沼津宿や伊豆国府三島（沼津の東）に近い。



図2 ●伊豆葦山の位置

2 吾妻鏡の「始まり」の部分

・治承4年(1180)4月9日から始まる。(新訂増補国史大系本)

◆治承四年庚子。四月小。九日辛卯。入道源三位頼政卿可討滅平相国禪門(清盛)由。日者有用意事。然而以私計略。太依難遂宿意。今日入夜。相具子息伊豆守仲綱等。潜参于一院第二宮之三条高倉御所。催前右兵衛佐頼朝以下源氏等。討彼氏族。可令執天下給之由申行之。

◇読み下し 治承四年庚子 [かのえね]。四月小。九日辛卯 [かのとう]。入道源三位頼政卿、平相国禪門(清盛)を討ち滅ぼすべき由 [よし]、日者 [ひごろ] 用意の事あり。然れども私の計略をもって、はなはだ宿意を遂げ難きにより、今日夜に入り、子息伊豆守仲綱らを相 [あい] 具し、ひそかに一院第二宮の三条高倉御所に参ず。前右兵衛佐頼朝以下の源氏らを催 [もよお] し、かの氏族を討ち、天下を執らしめ給うべきの由、これを申し行う。

◎現代語訳 源頼政は、平清盛を討ち滅ぼそうと、日頃から準備をしていた。しかしながら、自分一人の力ではとても以前からの願いを叶えることは難しいので、この日の夜に密かに、子息の仲綱を伴って一院(後白河法皇)の第二皇子(以仁王)の三条高倉の御所に参上し、「源頼朝以下の源氏に呼びかけて、平氏一族を討ち、天下をお取りなされるように」と申し上げた。

◎4月9日条の続き。現代語訳を見ていくが、参考のため、対応する原文を掲げておく。

そこで、藤原宗信に命じて、令旨を下された。さて、源義盛(源為義の末子)が折りしも在京していたので、「この令旨を持って東国に向かい、まず頼朝に知らせた後に、そのほかの源氏たちに伝えるように」と念入りにおっしゃられた。義盛は八条院蔵人に任命された(名前を行家に改めた)。

◆仍仰散位宗信。被下令旨。而陸奥十郎義盛。(廷尉為義末子。)折節在京之間。帶此令旨向東国。先相触前右兵衛佐之後。可伝其外源氏等之趣。所被仰含也。義盛補八条院藏人。(名字改行家。)

◎4月27日条。

以仁王の令旨(命令書)が、今日、頼朝のいる伊豆の北条の館に到着した。源行家が持参したのである。頼朝は、服装を水干に改め、まず男山の方角を拝んだ後に、謹んで令旨を拝見なされた。行家は甲斐と信濃の源氏に知らせるため、すぐにそちらへ向かった。頼朝は藤原信頼の反乱に加わった罪で去る永暦元年三月十一日に伊豆国に流されて以降、嘆きながら二十年の年月を送り、愁いながら三十二歳まで年齢を重ねてきた。しかしながら、ここ数年、平清盛が思いのままに天下を掌握して後白河上皇の側近を罰し、そればかりではなく、上皇を鳥羽離宮に押し込めなされ、上皇のお怒りは誠に深いものである。まさにこの時に、令旨が到着した。そこで頼朝は、正義の兵を挙げようと考えた。まさにこれは、「天の与えるものを取り、時が来たら行こう」という謂れのことであろう。平直方の五代の孫にあたる北条時政殿は、伊豆国の豪傑である。頼朝を婿とし、ひたすら頼朝に無二の忠節を示している。そのため頼朝は、最初に時政殿を呼んで、令旨を読ませなされた。

◆廿七日壬申。高倉宮令旨。今日到着于前武衛將軍伊豆国北条館。八条院藏人行家所持来也。武衛装束水干。先奉遥拝男山方之後。謹令披閱之給。侍中者。為相触甲斐信濃兩國源氏等則下向彼国。武衛為前右衛門督信頼縁坐。去永暦元年三月十一日。配当国之後。歎而送二十年春秋。愁而積四八余星霜也。而頃年之間。平相国禪閣恣管領天下。刑罰近臣。剩奉遷仙洞於鳥羽之離宮。上皇御憤。頻惱叡慮御。当于此時。令旨到来。仍欲举義兵。寔惟天与取時至行謂歟。爰上総介平直方朝臣五代孫北条四郎時政主者。当国豪傑也。以武衛為聳君。專頭無二忠節。因茲。最前招彼主。令披令旨給。

(参考までに) 吾妻鏡に載っている以仁王令旨の全文

下 東海東山北陸三道諸国源氏并群兵等所 応早追討清盛法師并從類叛逆輩事 右。前伊豆守正五位下源朝臣仲綱宣。奉 最勝王勅称。清盛法師并宗盛等以威勢。起凶徒亡国家。惱乱百官万民。虜掠五畿七道。幽閉皇院。流罪公臣。断命流身。沈淵込楼。盜財領国。奪官授職。無功許賞。非罪配過。或召釣於諸寺之高僧。禁獄於修学之僧徒。或給下於叡岳絹米。相具謀叛糧米。断百王之跡。切一人之頭。違逆帝皇破滅佛法。絶古代者也。于時天地悉悲。臣民皆愁。仍吾為一院第二皇子。尋天武天皇旧儀。追討 王位推取之輩。訪上宮太子古跡。打亡佛法破滅之類矣。唯非憑人力之構。偏所仰天道之扶也。因之。如有「帝王」三宝神明之冥感。何忽無四岳合力之志。然則源家之人。藤氏之人。兼三道諸国之間堪勇士者。同令与力追討。若於不同心者。准清盛法師從類。可行死流追禁之罪過。若於有勝功者。先預諸国之使節。御即位之後。必隨乞可賜勸賞也。諸国宜承知依宣行之。

治承四年四月九日

前伊豆守正五位下源朝臣

3 頼朝の挙兵

◎8月17日条

快晴。三島社の神事があった。安達盛長が頼朝の使者として参詣し、間もなく帰着した(神事開始以前である)。未の刻(午後2時)に佐々木定綱・経高・盛綱・高綱の四人兄弟が到着し

た。定綱・経高は疲れた馬に乗っており、盛綱と高綱は徒歩であった。頼朝はその様子を御覧になり、感動の涙をしきりに顔に浮かべ、「お前たちが遅れたために今朝の挙兵ができなかった。この恨みは大きいぞ」とおっしゃった。「洪水のために心ならずも遅れてしまいました」と定綱らが謝ったという。

◆十七日丁酉。快晴。三島社神事也。藤九郎盛長為奉幣御使社参。無程帰参。(神事以前也。)未剋。佐佐木太郎定綱。同次郎経高。同三郎盛綱。同四郎高綱。兄弟四人参着。定綱。経高駕疲馬。盛綱。高綱歩行也。武衛召覧其体。御感涙頻浮顔面給。依汝等遅参。不遂今暁合戦。遺恨万端之由被仰。洪水之間不意遅留之旨。定綱等謝申之云云。

◎戌の刻(午後8時)、盛長に仕える童子が釜殿で山木兼隆の召使いの男を生捕りにした。頼朝の御命令によるものである。この男は最近北条館の下女を嫁としたので、毎夜通って来ていた。「しかし今夜は、武士たちが館内に群集しており、これまでの様子と違っているので、きっと気づいてしまうだろう」とお考えになり、このように男を捕らえさせたという。その上で、「明日を待ってはいけない。それぞれ早く山木に向かい、雌雄を決せよ。この戦いによって生涯の吉凶をきめるのだ」とおっしゃった。また、合戦の時はまず火を放つように命じられた。特にその煙をご覧になりたかったためという。武士たちは、すでに競って奮い立っていた。

◆戌剋。藤九郎盛長僮僕於釜殿。生虜兼隆雑色男。但依仰也。此男日来嫁殿内下女之間。夜夜参入。而今夜勇士等群集殿中之儀。不相似先先之形勢。定加推量歟之由。依有御思慮如此云云。然間。非可期明日。各早向山木。可決雌雄。以今度合戦。可量生涯之吉凶之由被仰。亦合戦之際。先可放火。故欲覧其煙云云。士卒已競起。

◎(中略)さて頼朝は、軍勢を送り出した後、館の縁側に出て合戦のことを案じていた。また、火を放った煙を確認させるために、御厩の役人の江太新平次を木の上に登らせたが、しばらく煙を見ることができなかったので、警備のために館に留めていた加藤景廉・佐々木盛綱・堀親家らをお呼びになり、「すぐに山木に赴き、合戦に加わるように」とおっしゃった。自らの手で長刀を取り、景廉に与え、「兼隆の首を取って持ち帰るように」とよくよくお命じになったという。そこで三人は馬にも乗らず、蛭島通の堤を走って行った。盛綱と景廉は厳命通りに館に討ち入り、兼隆の首を取った。兼隆の家来たちも、同じく死を逃れることはできなかった。屋敷に火を放ち、すべて焼き尽くしたころには、すでに明け方近くになっていた。帰って来た武士たちは、館の庭に集まった。頼朝は、縁側で兼隆主従の首をご覧になったという。

◆爰武衛発軍兵之後。出御縁。令想合戦事給。又為令見放火之煙。以御厩舍人江太新平次。雖令昇于樹之上。良久不能見煙之間。召為宿直所被留置之加藤次景廉。佐佐木三郎盛綱。堀藤次親家等。被仰云。速赴山木。可遂合戦云云。手自取長刀。賜景廉。討兼隆之首。可持参之旨。被仰含云云。仍各奔向於蛭島通之堤。三輩皆不及騎馬。盛綱。景廉。任嚴命。入彼館。獲兼隆首。郎従等同不免誅戮。放火於室屋。悉以焼失。既暁天。帰参士卒等群居庭上。武衛於縁覧兼隆主従之頸云云。

*参考文献

石井進『日本の歴史7 鎌倉幕府』（中公文庫、2004年、初版1965年）

五味文彦『大系日本の歴史 5 鎌倉と京』（小学館、1992年）

本郷恵子『全集日本の歴史 6 京鎌倉ふたつの王権』（小学館、2008年）

池谷初恵『鎌倉幕府草創の地・伊豆韮山の中世遺跡群』（新泉社、2010年）

佐多芳彦『武士の衣服から歴史を読むー古代・中世の武家服制』（吉川弘文館、2023年）